

本書は極めて幅広い問題を扱いながらも、個々のテーマに向かう著者の研究姿勢は一貫した課題意識に裏付けられており、今後の日韓間での文化人類学・民俗学的研究にとって大きな示唆となるものであろう。ただ、本書の趣旨が現実に生かされていくためには、個々の分野におけるより豊富かつ詳細な研究の蓄積が、今後多くの研究者の手で生み出されなければならない。その意味で、最近になって従来の日本研究のあり方を見直そうとする動きが、韓国人研究者の間から出始めていることは、日韓間の学术交流にとって大きな前進であると言えよう。

(B6版302頁 風響社 1996)

瀬川昌久著

『客家—華南漢族の エスニシティとその境界—』

志賀 市子[※]

中国の人口の約93%を占めるのは漢族であるが、一口に漢族と言ってもその文化的内実は著しく多様である。そのため自己意識も多様に分化しており、「広東人」「上海人」「福建人」など、漢族のサブ・カテゴリー（民系）ともいべきものが形成されている。本書の主題ともなっている「客家」は、「広東人」「福建人」などと同様、中国東南部を中心に分布する漢族のサブ・カテゴリーの1つであるが、とりわけ強烈な自己意識と連帯性を持っていることで知られている。

本書を読み終えた後、何の気無しにインターネットでHakkaを検索してみたところ、いきなり810サイトという結果が出てきたのには少々めんくらった。評者がのぞいてみたのは、そのうちの「故郷を離れた客家のページ」とか「在米台湾客家協会ホームページ」など2、3のサイトに過ぎないが、そこから「客家グ

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

ローバルネットワーク」や「ワールドワイドリンク集」など、客家を自認する中国系アメリカ人の個人ホームページやサンフランシスコの客家レストラン、マレーシアの客家ユニオンなど、世界各地の客家関連のリソースにアクセスできるようになっている。ある個人のホームページには、「客家とは」というタイトルで、「…客家は漢民族の一族で、もともとは戦乱や迫害史によって中国の大陸の北から南下してきた民族の子孫であり、先住民の排斥を受け、外敵の戦いを通してリーダーシップ、団結精神が産み出された。金融界に強く、強力な財閥グループを作り、華南経済圏を支えているのも客家である…」うんぬんとあった。こうした典型的な「客家アイデンティティ」は、今やコンピュータネットワーク上にまで飛び交っているのである。

本書では、羅香林の業績に代表されるこれまでの客家研究は、こうした客家の強烈な自己意識の上に立脚していたため、客家の特殊性が強調され、さらには中原の正統漢族の継承者として自己正当化しようとする偏向性が見られたと指摘する。本書は、客家特殊論に傾きがちであったそうした巨視的な客家研究を超えて、客家を含む中国華南地域のエスニシティの動態性を、個々の地域社会の社会的、経済的、文化的状況を把握した上で、微視的な視点から再考することを目指した挑戦的な論著である。著者の瀬川昌久氏は、これまで主に香港新界地区をフィールドとして、中国の宗族に関する研究を次々と発表している。本書も著者のホームグラウンドともいべき新界地区でのフィールドワークを出発点としながらも、その後著者が行った広東省での調査の成果と歴史資料からのデータが豊富に取り入れられ、地域的にもまた歴史的スパンから見ても非常に視野の広い論考となっている。

なお本書に関しては既に、横山廣子氏による、本書の扱う領域に関する最新の研究動向を踏まえた書評が発表されている⁽¹⁾。一方評

者はこれまでエスニシティ論を専門としてきたわけでもなく、横山氏のような精緻な書評には到底及ぶべくもないが、評者は瀬川氏と同様、かつて香港をフィールドとして調査を行ったことがあり、本書で取り上げている香港のエスニックグループの有り様に関しても、多少は体験的に触れたことがあるという立場から、本書の紹介を行い若干の感想を述べてみたい。

まず第1章「問題提起—客家研究における巨視的視点と微視的視点」では、上述したように、羅香林の業績に代表される「客家ナショナリズム」に立脚した客家研究の問題点を指摘し、地域社会に根差した微視的な視点から華南地域のエスニシティを再考していくことの必要性が提唱されている。

第2章「地域社会の中の客家」では、香港新界地区を事例として、1つの地域社会におけるエスニシティがどのように表明されているのかが著者自身のフィールドワークでの体験から具体的に示される。実際の個々の地域社会におけるカテゴリー区分や「われわれ意識」の分化は、広東語を話す「本地人(広東人)」、客家語を話す「客家」、閩南系の漁民「福佬」といった教科書的な区分とは必ずしも一致せず、新界土着であることを強調する「圍頭人」、新来の客家との差別化を意図する「本地客家」などのカテゴリーが存在していた。著者はこうした新たなカテゴリーの出現を、香港の植民地化以後、特に第二次世界大戦後の新移民の大量流入という辞退によって生じたエスニシティの新展開の一側面と位置づける。さらに伝統社会においても、本地と客家は言語、通婚などから見て異なる社会圏を維持してきたことは確かであるが、両者の雑居や共住などから両者間でアイデンティティの転換も生じていたことを指摘している。

本地と客家との文化的相違の分析に関しては、正月行事の「点燈」や孤魂祭祀の大規模化した「太平清醮」、さらに祠堂の位牌祭祀の

様式などが取り上げられているが、評者の関心からないものねだりを言えば、葬儀の時の追善供養儀礼の内容や宗教儀礼を担当する道士の出身等にも注意してほしかった。評者の知る限り、香港で行われている追善供養儀礼の内容は、民系によってかなりの差異が見られる。評者は殯儀館で元朗のH壇という客家の法師の儀礼を見たことがあるが、本地ともまた福佬、潮州とも異なる独特のものであった。新界の客家(本地客家か新来の客家かは不明)や福佬系の水上市民が彼らの主なクライアントであるらしい。評者はその後H壇を追跡調査することはできなかったが、村人の側だけではなく、宗教儀礼を担当する宗教専門職側からの見方やクライアントの分布を知ること、本地、客家の習俗の違いを知る1つの手がかりにはならないだろうか。

第3章「客家をめぐるエスニシティの歴史的展開」では、新界地区のエスニックカテゴリーへの帰属意識がどのような歴史的過程を経て形成され、維持されてきたのかを知るために、新界地区の諸宗族の移住経路を族譜を主な資料として辿っている。著者は族譜に全面的に依拠するのでも、族譜を捏造されたものとして全く退けるのでもなく、族譜を「当事者自身によって主観的に捉えられた過去の記録」であると位置づけ、その資料的制約と価値を十分認識した上で積極的に用いている。付け加えておくならば、族譜の資料的価値についての考察は、著者が昨年発表した「中国人の族譜と歴史意識」という論文の中でさらに深められている。その論文の中で、著者は族譜は単なる過去の事実の再構成を行うため補助的資料としての価値だけでなく、族譜を通して、「過去を必要とし、絶えずそれを反芻し再生産している現在の人々の意識の構造を問う」ことの意義を強調している⁽²⁾。従来、口頭伝承にこそ人々の心意が表れていると考え、文字資料にはどちらかといえばあまり積極的価値を見出してこなかった民俗学の分野

にとっても傾聴に値する見解である。

本章後半では、広東、台湾など華南の他地域の事例と比較検討しながら、客家の自己意識や他のサブ・カテゴリーとの関係は地域社会の特質に応じて多様であること、そうした多様性を生み出した要因の1つとして、移住パターンの違いを挙げている。断続的な小規模な移住の場合は、移住先の地方文化に同化していくが、清初の「遷界令」のような国家政策としての大規模移住の場合はインパクトも大きく、定着先の地域社会内部においてその後も輪郭を失わないカテゴリーとして存続したというのである。さらに著者は、多様性を生み出す他の要因として、県城などの地方小都市や上級マーケットタウン、そして海外の移住先での民系間の融合作用や競合関係についても言及しており、説得力ある分析となっている。

第4章「漢族／少数民族境界の再考」では、客家のアイデンティティや他の民系との境界のあり方を、漢族内部の民系の問題にとどまらず、少数民族を含めた中国南部のエスニック・カテゴリーの境界を再考する手がかりとして、客家との深い関係が指摘されてきた少数民族の1つ畬族を取り上げている。客家との文化的類似が多く見られる畬族は、現在では中国政府の民族政策の効果もあって漢族とは異なる民族であるという自己意識を保持しているが、解放前にはそうした明確な自己意識が存在したかどうかは疑わしく、また現在客家の一部から畬族であるという主張を行う人々も出てきているという。著者はこうした事例から、中国東南部地域のエスニシティーを理解するには、少数民族と漢族との間に強固な境界線を引いてしまうのではなく、当該地域の地方文化に潜む先住民文化や先住民の漢化といった問題に目を向けていくことを提唱している。

最終章「客家のアイデンティティと歴史意識」では、客家の正統意識を支えている背景

としての外来性や族譜、移住伝承などについて再考し、そうした要素が客家固有の属性というわけではなく、他の民系にも認められることを明らかにしている。その上で、客家に強烈な正統意識が形成されるに至ったのは、羅香林ら客家知識人による学問的領域からの発言や客家の中原起源伝承が族譜という文字媒体を通じて行われたことによるところが大きいと指摘している。ここで評者が共感を覚えたのは、「客家の知識人層を中心に形成された客家の強烈な正統意識が、意識的、無意識裡に学問的研究の領域へと滲入することによって生じる偏向の可能性とそうした滲入をそもそも可能なものにしていく中国的な、明らかに中国的な文化伝統のあり方」(188頁)という指摘である。正統な中国人あるいは正統な中国文化の担い手を自負するあまり、そうした自己意識が純粋な学問的研究にも影響を与えてしまう面は、客家研究のみならず、評者の関わっている道教研究の分野にも、とりわけ中国人研究者の中に顕著に認められるからである。そういう意味では、本書は客家研究という限られた分野だけでなく、中国文化に関心を持つ者すべてにとって示唆的な書と言えよう。

最後に少々気になった点を2、3述べておきたい。1つは本書で提起している数々の刺激的な仮説を、今後どのように実証していくことができるかという点である。たとえば「客家の『非正統史』的部分の解明のためには、フィールドワークを通じて得られる口頭伝承レベルの情報によるしかあるまい」(145頁)と述べているが、今後広東省でよりインテンシブなフィールドワークを行ったとしても、現在の農村での調査から、古代の先住民文化にまで遡る民俗資料を収集することが果たして可能だろうかという疑問が湧いてくる。

また、たとえば「圍頭話」と「東莞話」の近縁性、客家語と畬語との近縁性など、2つの言語を比較する際に、「いくつかの語彙から

推測する限り…極めて類似したものに思われた」(140頁)など、他者の研究と著者の印象からの推測にとどまっている記述が散見されるのも気になる。今後仮説の正しさを1つ1つ論証していこうとするなら、言語学、方言地理学などの分野の力を借り、より精密度の高いデータを集めることが求められるだろう。

さらに、何故客家のみがあれほどまでに強烈な自己意識とグローバルな連帯性を確立するに至ったのかという疑問も依然として残る。著者はその背景として羅香林ら客家知識人による学問的領域からの発言や族譜という文字媒体の効果を挙げているが、「客家」というカテゴリーやそこに付与された属性自体に、国境の枠組を越えて連帯し、ナショナリズムを鼓舞させる何かがあるのではないかという気もする。特に「客家」の、故郷を離れて流浪し、

土着民との衝突や迫害を経験しつつ団結心をつちかってきた民という属性は、「ユダヤ人」意識にも似ていて興味深い。地域社会に根差した微視的な「客家」研究も重要だが、インターネット上の「客家グローバルネットワーク」や「客家ワールドワイドリンク集」に名を連ねている人々にとっての「客家」の意味を改めて探ることも客家研究の課題の1つであろう。

(風響社、1993年)

参考文献

- (1) 横山廣子「書評：瀬川昌久著『客家—華南漢族のエスニシティとその境界』」『民族学研究』61-1, 1996年。
- (2) 瀬川昌久「中国人の族譜と歴史意識」『東洋文化』76, 1996年。

新刊紹介

萩原秀三郎著

『稲と鳥と太陽の道』

日本文化の基層にあるものは、“稲”と“鳥”と“太陽”とを核とする複合的精神文化にあるとする著書の30年来の思索の旅が一書にまとめられた。

構成は序章鳥の信仰を追う、第1章太陽と鳥の信仰(1.太陽を射る 2.太陽の樹と鳥 3.鳥装の習俗と鳥巫 4.巫祝文化の系譜)第II章稲の起源と日本への道(1.穀物出土分布と稲作の起源 2.モチ文化とその担い手 3.モチなし正月と“越文化” 4.稲作の伝播と海上の道)第III章稲が運んだ精神文化(1.イネと湿原祭祀—チガヤ信仰・若水・歌姫— 2.太陽霊と魂と稲魂 3.ケ・ケガレ・コモリ・ハレ 4.草莊神の出現 5.神の去来と東西軸宇宙観となっている。

民俗写真家として、その民俗学的教養に裏打ちされたカメラアングルから、日本各地の民俗芸能、神事の基調を洞察し、その表徴として、

稲・鳥・太陽に集約される意味と背景を、朝鮮半島のソッテ(鳥竿)から、わが国に稲を伝えたと筆者が考える楚人の末裔、苗族の芦笙柱までたどりつく道程が淡々と論じられていく。

対馬の土葬の墓に建てられる霊屋である安楽堂の上には、魂を早くあの世に運んでくれるツバメが挿されているなどなじみのうすい資料紹介も処々にみられ、著者の行程をうかがわせてくれる。関東地方のオビシャ行事、餅無し正月、花祭りの白山行事など従来多く論じられた問題も、新たな視点で読み取られていく。霊を運ぶツバメには、釈迦入定の際の遅刻からその役を負わされたとの仏教説話に基く解説が各地の棺台の燕に関して語られるなど中途に添加された部分もある。そのような歴史的検証も必要であろうが、民俗の比較民俗学的考察の醍醐味を味わせてくれる一書である。(佐野賢治)

1996年7月刊行 A5判 279頁 大修館書店